

6. 選択的意味記憶障害の認知リハビリテーション

—everyday life training の試み—

○ 齋藤 文恵¹⁾ 三村 将¹⁾ 加藤元一郎¹⁾
 秋根 良英¹⁾ 吉野 文浩²⁾ 吉益 晴夫²⁾
 鹿島 晴雄²⁾

【症例】 54歳右利き男性。高校卒でデザイン会社経営。平成6年3月12日発熱、頭痛、意識障害が出現。頭部MRI及び髄液ウイルス抗体価の検査でヘルペス脳炎と確定診断。

〔神経心理検査〕 7月の時点で、SLTAは当初の語義失語的な特徴をもつ健忘型の失語から非失語の範囲に移行。WAI S-RはVIQ 86, PIQ 115。視覚的な記銘・構成課題や、Wisconsin Card Sorting Testは良好。意味記憶検査にて野菜・果物・加工食品に重度の意味記憶障害を認めた。実生活上も「名前を聞いても、実物を見ても、実際に食べても、どんな食べ物かわからない」と訴える。

【トレーニング】 入院中に毎食のメニューをイラスト付きで書き出すことを導入とし、退院後も食前に料理を見ながら絵を描くことを継続した。妻の協力を得て料理名や使っている素材の名前を書き入れ、彩色も加えた。そして実際に食べながら味や匂い、歯応え、舌触りによってその食べ物の記憶を確認する、というパターンを繰り返した。すなわち、この描画課題は実生活の中で視覚、聴

覚、嗅覚、味覚、口腔運動覚、口腔内触覚といった多種の感覚を総動員してなされた食べ物に対する意味記憶回復トレーニングと位置づけられる。

【経過】 毎日の努力にもかかわらず「繰り返して同じものが出てきてもわからない」「食べてしまうと何だったかわからなくなる」「名前は知っているが品物とつながらない」などと述べており、学習効果は全く現われなかった。平成7年1月に行なった意味記憶検査の結果では数値上若干の改善はみられるが、場面による変動が大きく、実生活の上では「食べ物がわからない」という状態は変わらない。

【まとめ】 食べ物全般にわたり選択的意味記憶の障害を示すヘルペス脳炎後遺症患者に対して、妻の協力による半構造化されたeveryday life trainingを施行した。この方法は視覚、聴覚、味覚、嗅覚、口腔内感覚など多様なモダリティから情報を入力することにより、意味記憶の即通ないし再建を試みる実生活上の反復訓練であると考えられた。しかし本人と妻の努力にもかかわらず、明らかな改善は得られなかった。

1) 東京歯科大学市川総合病院精神神経科

2) 慶應義塾大学医学部精神神経科